

人物で語る 日本デンマーク

⑩ 岡田庄太郎Ⅱ

安城地方で行われていた多角形農業は、昭和の初めの農村恐慌時にそれを乗り切る底力を発揮したことから、一躍日本デンマーク安城の名を高めることになった。そのため、全国からの視察者が安城を訪れるようになる。視察者は、国鉄安城駅に降り立つとその足で徒歩五分ほどの町農会館を目指した。そして、二階の会議室で、小柄だががっちりした体格の岡田庄太郎から日本デンマーク農業の話を知ることになる。庄太郎は、明治用水の開削から、開墾時代の苦難を乗り切って多角形農業の現状に及ぶ安城農業の歩みを説明した。視察者は、このドラマに感動する。そして、安城農林学校・農事試験場・板倉農場などへ案内された視察者は、庄太郎の情熱的な説明に胸の高鳴りを覚えながら、安城を後にしたのである。その後、庄太郎のところへは数多くの礼状が届いた。その中に講演依頼の手紙が交じるようになり、それからの庄太郎は、農会経営の第一人者として、農業指導に全国

各地に出向くことになった。

さらに岡田庄太郎は、農会は農家の経済活動への助言指導ばかりではなく、農村文化の向上をも図らねばならないと考え、文化事業を計画した。

一つ目は、とりわけ道徳面に重点を置き、町農会の主催で、加藤咄堂・椎尾辨匡・曉烏敏・佐々木月樵らの宗教家を招き、精神修養のための講演会や講話会を開いた。町農会が農民の情操と知的レベルの向上を目指して活動することは全国的にも例を見ないことであった。

二つ目は、農業図書館の設立である。以前から農民の教養を高めることが農村振興につながると考えていたからである。一九三一年（昭和六年）、警察署の旧建物を買い取り、町農会館裏に移築して、そこを全国初の農業図



▲農業図書館



▲安城町農会報の表紙

書館とした。翌々年には各集落に読書会を結成し、巡回文庫・輪読会などにより活発な図書館経営を行った。そして、一九三五年（昭和一〇年）には、図書館は運営面で文部省から表彰を受けるようになった。なお、岡田庄太郎は、一九四〇年（昭和十五年）から図書館長を務めた。ちなみに、この図書館は、現在の市の図書館の前身になるものである。

三つ目は、一九三〇年（昭和五年）、農民の指導啓発のために、「安城町農会報」を月刊誌として発行したことである。毎号論説を寄せている岡田庄太郎は、同年一二月号の巻頭言に「昭和五年を送る」と題して、「現代安城は年二万の視察者を迎える農業のエルサレムである。農業巡礼に回る人は必ず東海道線安城駅を目標として来る」と書き、日本デンマークの繁栄ぶりをおう歌している。

岡田庄太郎は、日本デンマークを担う農民に文化の息吹を吹き込んだ点で、安城の文化を築いた人と言ってよい。

文 星野光俊